

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 12 日現在

機関番号：13201

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2012～2014

課題番号：24401024

研究課題名(和文) 自言語による漢文文献の訓読についての理論的及び実証的研究

研究課題名(英文) Theoretical and empirical research on kundoku reading of classical Chinese texts in the vernacular

研究代表者

小助川 貞次 (KOSUKEGAWA, Teiji)

富山大学・人文学部・教授

研究者番号：20201486

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 14,500,000円

研究成果の概要(和文)：訓読は古典籍(漢文文献)を読解する方法の一つで、外国語文献として読解する段階と読解者の言語(自言語)で読解する段階に於いて古典籍本文に加点現象が起こる。加点内容には自言語を超えた共通性と自言語に依存する特殊性とがあり、古典籍の言語と読解者の言語の種類の違いによって加点内容も異なる。漢文文献に直接加点を行った資料が現存する言語は、日本語、中国語、朝鮮語、ベトナム語である。同様の現象は中世欧州のラテン語文献にも存在し(欧州諸語による加点・書込)、これら以外の言語文化圏においても古典語文献を有する場合には同様の現象が存在することが推測され、言語文化圏を超えた普遍的な活動が存在したと考えられる。

研究成果の概要(英文)：Kundoku is an approach to understand classical materials by adding glosses, particularly known by that of Classical Chinese; both understanding of foreign language texts and re-interpretation of that in their own language rule the glossing phenomena on classical materials. There remain commonalities and particularities in glossing among languages: it is determined by both source language and target language concerned. We have glossed materials of Classical Chinese in Chinese, Japanese, Korean, and Vietnamese. Similar phenomena are attested in the mediaeval Latin materials using European vernacular languages and marks. In other cultural sphere as well, provided that common classical material existed, a glossing convention would be in the same way, which makes it a ubiquitous behaviour over cultural-linguistic spheres.

研究分野：日本語学、訓点語学

キーワード：訓読 自言語 漢文文献 漢字文化圏 ラテン語文化圏

1. 研究開始当初の背景

訓読は日本語だけの現象ではなく、中国語（敦煌加点本）朝鮮語（口訣資料）ベトナム語（字喃資料）など漢字文化圏の諸言語に共通する現象である。このような漢字文化圏における訓読については、すでに1960年代後半から国内外で研究が開始され、特に2000年に韓国国内で高麗時代加点と推定される点吐口訣資料（ヲコト点資料）が発見されたことが契機となり、2001年以降、訓読に関する国際会議が継続的に開催されている。

一方、非漢字文化圏、すなわちヨーロッパ世界での同様の現象については、漢文訓読研究者にはほとんど知られていないが、中世ヨーロッパにおいてもラテン語原典にヨーロッパ諸語で直接書き込んだ注釈資料が存在し、すでに19世紀から研究が行われている。

いずれの言語文化圏においても読もうとする対象物（テキスト）が、ある時代ある地域において広く分布・存在した古典籍（仏典、漢籍、聖書、国書）である点は重要な共通点である。訓読はその場限りの単なる通訳や翻訳とは異なり、その古典籍の内容を深く見極めようとする学問的な活動であると言える。このような視点に立てば、訓読は言語圏・文化圏を超えた「人類共通の知的財産・知的活動」として再評価・再構築できる対象となり、研究の幅も格段に広がる。

2. 研究の目的

本研究は、自言語による漢文文献の訓読について、漢字文化圏だけではなく中世ラテン語世界を含めたグローバルな視点の中で理論的・実証的に検討しながら、「訓読とは一体どのような言語現象なのか」という根本的な課題を解明し、その成果を訓読に関心を持つ多くの研究者・一般社会に効果的に伝え、「人類共通の知的財産・知的活動」としての訓読・訓読研究の可能性を探ろうとするものである。

(1) 基礎的調査・実証的研究

漢字文化圏における確実な訓読資料を国内外の実地調査によって収集する。

(2) 理論的研究

調査データをこれまでの研究で明らかにしてきた「理論的枠組み」（「言語類型と訓読加点との関係」「訓点の類似性と訓読加点のプロセス」「訓読の起源と展開に関する推定図」）に当てはめて、訓読概念を再検討するとともに、グローバルな視点に立った検討を行うために、ヨーロッパにおける「注釈資料」の専門家と情報交流を行ない、訓読についての新たな理論的枠組みを構築する。

(3) 研究成果の出力についての研究・取纏め研究成果を一般社会に向けて発信するための仕組みを調査・開発するとともに、開発された仕組みのもとで研究成果を公開し、最終

年度に国際ワークショップ「自言語による漢文文献の訓読」を開催する。

3. 研究の方法

「訓読とは一体どのような言語現象なのか」という根本的な課題を解明するために、これまでの資料的蓄積をさらに国内外の原本調査によって質的に拡充する。その上で確実な訓読資料に基づいて訓読に関する理論的枠組みを再検討・再構築し、その過程でこの枠組みをより普遍化するために漢字文化圏以外の中世ヨーロッパにおける「注釈文献」の専門家との情報交流を行なう。本研究によって得られた研究成果をより多くの研究者・一般社会に理解してもらうための仕組みを調査・開発し、世界に向けて発信する。

(1) 漢字文化圏における各言語の訓読資料については、これまでの研究による資料的蓄積（デジタル資料を含む）がある。本研究では、これら蓄積された資料を有効に活用しながら「訓読とは一体どのような言語現象なのか」という根本的な課題を解明していくが、これまでの調査資料は十分であったとは言えないため、本研究ではこれまでに蓄積された資料の再調査を含めて、国内外での原本調査を実施し、質的な向上を図る。

(2) 理論的研究を行うに当たっては、申請者が示した「言語類型と訓読加点との関係」「訓点の類似性と訓読加点のプロセス」「訓読の起源と展開に関する推定図」について確実な訓読資料に基づく再検討・再構築を行なうが、より普遍的な理論とするために、漢字文化圏以外の中世ヨーロッパにおける「注釈資料」の専門家とワークショップ形式の情報交流（原本調査を含む）を行う。

(3) 研究成果の先進性・独創性に鑑み、研究成果を多くの研究者・一般社会に理解してもらうための仕組みを調査・開発する。研究成果には各言語資料の画像も含まれるため、所蔵権について十分に調査・検討を行った上で、デジタル画像処理・プロモーション制作に実績のある専門業者と検討を重ね、最終年度に公開する。

4. 研究成果

(1) 基礎的調査・実証的研究

下記のそれぞれにおいて実地調査を行い、研究資料の拡充と新知見の獲得を図った。

敦煌漢文文献：大英図書館（2012.11、2013.6）フランス国立図書館（2013.11）

ベトナム漢文文献：ベトナム社会科学院漢喃研究所（2013.2、2014.12）、極東学院（2013.2、2014.12）ベトナム国家大学ホーチミン人文社会科学大学言語学資料室（2013.2）、ベトナム国家大学ハノイ人文社会科学大学歴史学研究室（2014.12）

韓国口訣資料：ソウル大学校奎章閣 (2014.5)

中世ラテン語注釈文献：アイルランド・ゴールウェイ大学、フランス国立図書館 (2013.11-12)、オックスフォード大学、ケンブリッジ大学 (2014.1)

国内現存漢文文献(訓点資料)：東洋文庫、東京大学、国立公文書館、国立国語研究所、東京国立博物館、京都国立博物館

(2) 理論的研究

ベトナム漢文文献：ベトナム日語日文化研究者・字喃資料研究者と現地調査時に情報交流を行い(2013.2、2013.10、2014.12)、これまで把握できていなかった現存資料、所蔵目録、デジタルデータベースを確認し、さらにベトナム字喃研究者を日本に招聘してベトナムの漢文訓読について情報交流を行った(2013.10)。これらの成果をもとに理論的枠組みの前提となる「訓読」の概念について検討を行い、ベトナム・ハノイ大学での国際シンポジウムにおいて研究発表を行った(2013.10)。

韓国の口訣資料：韓国の漢文訓読研究者を日本に招聘し、国内現存の漢文文献の調査を行うとともに研究情報の交流を行い(2014.8)、韓国の口訣資料研究で行っている精密記述の方法を日本の訓点資料に当てはめる試みを行ない、『日本論語訓点本の解読と翻訳(下)』を刊行した。

中世ラテン語注釈文献：ヨーロッパの研究者を日本に招聘し、国内現存の漢文文献の調査を行なうとともに、国際ワークショップ「自言語による古典語文献の読解(1)(2)」において情報交流を行い(1)2013.7、(2)2014.8)、さらにフランス国立図書館において同館所蔵の中世ラテン語注釈文献資料を用いたワークショップを行った(2013.11)。

以上の理論的検討を踏まえて漢字文化圏と欧州ラテン語文化圏を含めた理論的枠組みを構築し、日本語学会秋季大会におけるワークショップにおいて発表した(2014.10)

(3) 研究成果の公表

2012年度：国立国語研究所との共同開催セミナー「漢文訓読再発見」(2012.7、富山)を行い、録音記録資料(文字起こしデータ)を国立国語研究所共同研究報告書 12-08「訓点資料の構造化記述成果報告書」(高田智和・小助川貞次編、2013.3、国立国語研究所)に掲載した。また、龍谷大学で開催された国際シンポジウム Codicology of Hanzhi Scripts (漢文文献の写本学)(2013.3)で研究発表「敦煌漢文文献(漢籍)について」を行なった。さらに日本の漢文訓読史に関する研究情報を海外に発信するための準備として、小助川貞次「漢文訓読史概説の構想」(富山大学人文学部紀要第56号、2012)の英語訳を上述の「訓点資料の構造化記述成果報告書」に掲載するとともに中文訳の作成を行った。

2013年度：理論的枠組みの前提となる「訓読」の概念について検討を行い、ベトナム・ハノイ大学での国際シンポジウム(2013.10、ハノイ)において研究発表を行った。

2014年度：研究成果の公表・発信については種々の制約が多いため、十分な再検討を行った上で、韓国日本言語文化学会(2014.5、ソウル)、訓点語学会(2014.5、京都)、日本語教育国際研究大会(2014.7、シドニー)、国際ワークショップ「自言語による古典語文献の読解(2)」(2014.7、東京)、JSL漢字学習研究会(2014.9、さいたま市)の国内外の学会・研究会において発表した上で、本研究の最終取纏めとして、日本語学会秋季大会(2014.10、札幌)においてワークショップ「自言語による漢文文献の訓読」を行った。また、これまでの研究成果を欧米に向けて発信するために、2013年度に実施したワークショップ「自言語による古典語文献の読解(1)」の内容を編集し、フランスの歴史言語学ジャーナル *Hel* に投稿・掲載した。さらに、以上の取纏めた研究成果を漢字文化圏諸地域で一層理解してもらうために、World Script Symposia 2014(2014.10、ソウル)、ベトナム国家大学ハノイ人文社会科学大学で特別講義(2014.2、ハノイ)を行った。

(4) 結論

訓読は、古典籍(漢文文献)を読解する方法の一つで、外国語文献として読解する段階と読解者の言語(=自言語)で読解する段階に応じて古典籍本文に加点現象が起こる。加点内容には自言語を超えた共通性と、自言語に依存する特殊性とがあり、古典籍の言語と読解者の言語の種類の違いによって加点内容も異なる。漢文文献に直接加点を行った資料が現存し、かつ訓読現象が確認できる言語は、日本語、中国語、朝鮮語、ベトナム語である。同様の現象は漢字文献以外の古典語文献、すなわち中世ヨーロッパのラテン語文献にも存在し(図1)、これら以外の言語文化圏においても古典語文献を有する場合には同様の現象が存在することが推測され、言語文化圏を超えた普遍的な活動が存在したと考えられる(図2)。

| | 欧州 | 東アジア |
|-------|---------------------------|----------------------------------|
| 文化圏 | ラテン語文化圏 | 漢字文化圏 |
| 古典語文献 | 中世ラテン語原典 | 漢文文献：仏典・漢籍 |
| 読解方法 | ↑ 読解に伴う注釈・加点技法 | ↑ 読解に伴う注釈・加点技法 |
| 自言語 | 古アイルランド語 古ドイツ語 古英語等 | 中国語 朝鮮語 日本語 ベトナム語 (ウイグル語等) |

図1 訓読現象の共通構造

X 言語文化圏

X 言語による古典語文献



読解に伴う注
釈・加点技法

X 言語文化圏に所属する
中心言語及び周辺諸言語
 $X_0 \cdot X_1 \cdot X_2 \cdot X_3 \cdots X_n$

図2 訓読現象の普遍性

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計8件)

小助川貞次、漢文訓読の多面的意義、JSL 漢字学習研究会誌、査読無、7、2015、pp.56-65

John Whitman、Teiji Kosukegawa、Valerio Alberizzi、Franck Cinato、Padraic Moran、Alderik Blom、Andreas Nievergelt、Lecture vernaculaire des textes classiques chinois (Reading Chinese Classical texts in the Vernacular)、Hel、7、査読有、2014、Web上の電子媒体
<http://dossierhel.hypotheses.org/dossiers-hel7-sommaire>

John Whitman & Yuko Yanagida、A Korean grammatical borrowing in Early Middle Japanese kunten texts and its relation to the syntactic alignment of earlier Korean and Japanese、Japanese/Korean Linguistics、査読有、21、2014、pp.121-135

小助川貞次、ベトナムの加点資料について、訓点語と訓点資料、査読有、133、2014、pp.15-25

グエン・テイ・オワイン、(講演記録)ベトナムの漢文訓読について、査読無、133、2014、pp.1-14

ジョン・ホイットマン、「訓読」は漢字文化圏だけのものか、日本語学、査読無、32-13、2013、pp.26-41

Kosukegawa Teiji、A conceptual structure for an historical outline of KANBUN KUNDOKU、国立国語研究所共同研究報告書、査読無、12-08、2013、pp.3-19

高田智和、小助川貞次、NINJAL セミナー「漢文訓読再発見」記録、国立国語研究所共同研究報告書、査読無、12-08、2013、pp.97-142

〔学会発表〕(計19件)

小助川貞次、自言語による漢文文献の訓読と加点、ハノイ国家大学人文社会科学大学特別講義、2014.12.2、ベトナム国家大学ハノイ人文社会科学大学(ベトナム・ハノイ)

小助川貞次、漢字漢文が周辺諸言語に及ぼした影響の再評価について、World Script Symposia 2014、2014.10.25、世宗文化会館(韓国・ソウル)

小助川貞次、石塚晴通、伊藤英人、岩月純一、ジョン・ホイットマン、ヴァレリオ・ルイジ・アルベリッツィ、月本雅幸、山本真吾、日本語学会ワークショップ「自言語による漢文文献の訓読」、日本語学会秋季大会、2014.10.18、北海道大学(札幌市)

小助川貞次、漢文訓読の多面的意義、第51回JSL漢字学習研究会/NINJAL セミナー、2014.9.20、国際交流基金日本語国際センター(さいたま市)

小助川貞次、ジョン・ホイットマン、高田智和、Alderik Blom、Franck Cinato、Padraic Moran、Andreas Nievergelt、(パネル)自言語による古典語文献の読解、国際ワークショップ「自言語による古典語文献の読解(2)」/「日本列島と周辺諸言語の類型論的・比較歴史的研究会」研究発表会、2014.7.31-8.1、国立国語研究所(立川市)

小助川貞次、漢字文化圏における訓読現象の再評価、日本語教育国際研究大会、2014.7.12、シドニー工科大学(オーストラリア・シドニー)

小助川貞次、ベトナムの加点資料について、第110回訓点語学会、2014.5.25、京都大学(京都市)

小助川貞次、日本の漢字・漢文学習<漢文訓読>、韓国日本言語文化学会、2014.5.10、崇実大学校(韓国・ソウル)

小助川貞次、漢字文化圏諸言語の加点現象から見た「訓読」概念の再定義、ハノイ大学第2回国際シンポジウム「ベトナムにおける日本語教育・日本研究」、2013.10.15、ハノイ大学(ベトナム・ハノイ)

小助川貞次、On Explaining what kundoku is in the premodern Sinosphere(訓読とはなにか)、International Work-shop Reading Classical Texts in the Vernacular(自言語による古典語文献の読

解) 2013.7.30、早稲田大学(東京)

Valerio Luigi Alberizzi, An Introduction to kunten glossed texts in Japan, International Work-shop Reading Classical Tests in the Vernacular (自言語による古典語文献の読解) 2013.7.30、早稲田大学(東京)

Padraic Moran, Medieval glossed texts in the Irish tradion, International Work-shop Reading Classical Tests in the Vernacular (自言語による古典語文献の読解) 2013.7.30、早稲田大学(東京)

Andreas Nievergelt, Medieval glossed texts in the German tradion, International Work-shop Reading Classical Tests in the Vernacular (自言語による古典語文献の読解) 2013.7.30、早稲田大学(東京)

Franck Cinato, Medieval glossed texts in the Latin tradion, International Work-shop Reading Classical Tests in the Vernacular (自言語による古典語文献の読解) 2013.7.30、早稲田大学(東京)

Alderik Blom, A comparison of medieval glossing traditions, International Work-shop Reading Classical Tests in the Vernacular (自言語による古典語文献の読解) 2013.7.30、早稲田大学(東京)

グエン・テイ・オワイン、ベトナムの漢文訓読について、第109回訓点語学会、2013.10.20、東京大学(東京)

ジョン・ホイットマン、Kundoku: What is it, and did anything like it exist in the medieval West?, International workshop on vernacular literacy in medieval Europe and East Asia, 2013.11.29, NUI Galway (アイルランド・ダブリン)

小助川貞次、On the Chinese classics of the Dunhuang manuscripts, International Symposium "Codicology of Hanzi Scripts-As the middle point report-", 2013.3.11-13、龍谷大学(京都市)

Nathalie Monnet, On the Pelliot collection, International Symposium "Codicology of Hanzi Scripts-As the middle point report-", 2013.3.11-13、龍谷大学(京都市)

[図書](計5件)

石塚晴通・小助川貞次・會谷佳光、勉誠出版、国宝毛詩・重要文化財礼記正義巻第五

残巻(東洋文庫善本叢書第5巻) 2015、117

呉美寧・漢文訓読研究会(編)(小助川貞次序文) 崇実大学校出版部、日本論語訓点本の解読と翻訳(下) 2015、658

石塚晴通・小助川貞次、勉誠出版、梵語千字文・胎蔵界真言(東洋文庫善本叢書第6巻) 2014、82

藤本幸夫(編) 勉誠出版、日韓漢文訓読研究(「日本における十世紀加 points の漢籍訓点資料の位置」を執筆) 2014、566

石塚晴通・小助川貞次、勉誠出版、史記夏本紀・秦本紀(東洋文庫善本叢書第1巻) 2014、109

6. 研究組織

(1) 研究代表者

小助川 貞次 (KOSUKEGAWA, Teiji)
富山大学・人文学部・教授
研究者番号: 20201486

(2) 研究分担者

ジョン ホイットマン (WHITMAN, John)
国立国語研究所・教授
研究者番号: 50625605
(平成26年度より研究協力者)

(3) 連携研究者

藤本 幸夫 (FUJIMOTO, Yukio)
麗澤大学・客員教授
研究者番号: 70093458

月本 雅幸 (TSUKIMOTO, Masayuki)
東京大学・大学院人文社会系研究科・教授
研究者番号: 60143137

山本 真吾 (YAMAMOTO, Shingo)
白百合女子大学・文学部・教授
研究者番号: 70210531

高田 智和 (TAKADA, Tomokazu)
国立国語研究所・准教授
研究者番号: 90415612

(4) 研究協力者

石塚 晴通 (ISHIZUKA, Harumichi)

池田 証寿 (IKEDA, Shoju)

伊藤 英人 (ITO, Hideto)

岩月 純一 (IWATSUKI, Junichi)

呉 美寧 (Oh, Mi-Young)

朴 鎮浩 (Park, Jin-Ho)

グエン・テイ・オワイン (NGUYEN, Thi Oanh)

ファム・ヴァン・グオアイ (PHAM, Van Khoai)

ナタリ・モネ (MONNET, Nathalie)

ヴァレリオ・レイジ・アルベリッツィ

(ALBERIZZI, Valerio Luigi)

ポーリック・モーラン (MORAN, Padraic)
フランク・シナート (CINATO, Franck)
アンドレアス・ニヴェルゲルト (NIEVERGELT,
Andreas)
オルデリック・ブロム (BLOM, Alderik)